Kappa Novels

長編推理小説・書下ろし

裁判官の陰謀

和久峻三

カッパ・ノベルス

お願い——

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢なども、お書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三
（郵便番号112）
光文社　出版局

長編推理小説　**裁判官の陰謀**

昭和52年 5 月30日　初版発行
昭和52年 12月25日　4刷発行

著　者　和久峻三（わくしゅんぞう）
京都市東山区山科土仏町11-70
発行者　小保方宇三郎
印刷者　鈴木貞三郎
東京都文京区水道1-2-1
公和印刷

発行所　東京都文京区音羽2　株式会社 光文社
振替 東京 6-115347　電話 東京 (942) 2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。（ナショナル製本）
表紙の模様・意匠登録　116613
© Syunzō Waku 1977
(分)0-2-93(製)02318(出)2271(0)
Printed in Japan

長編推理小説・書下ろし

裁判官の陰謀

和久峻三

カッパ・ノベルス

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertong

裁判官の陰謀　目次

亡命公使暗殺　5
総理大臣の領収書　35
消えた証人　66
裁判記録の謎（なぞ）　97
黒幕登場　121
法服の呪術師（じゅじゅつし）　154
逆転　206
解説……権田萬治（ごんだまんじ）　228

イラストレーション　辰巳四郎（たつみしろう）

第一章　亡命公使暗殺

1

十月二十三日夕刻。

東京の空は、暮れなずむ黄昏どきの鮮やかな藍色に塗りこめられ、日没の残光が、暗い灰色のちぎれ雲を、金色に縁どっていた。

亡命者を乗せた濃紺のリンカーンは、すべるように、港区赤坂のアメリカ大使館前を出発した。

待ち構えていた報道陣のカメラストロボの放列が、いっせいに閃光を放ち、十六ミリカメラが作動して、後部座席に腰を落とした亡命者の表情を、車窓越しにとらえようと、リンカーンを追跡した。

亡命者、李青玉は前途に待ちうけているかもしれない幾多の障害と危険を慮り、不安を噛みしめながら、分厚な唇を固く結んで、緊張に頬をひきつらせ、じっと前方をにらんでいた。

リンカーンのボンネットの両側に立てられた星条旗が亡命者の自由への脱出を謳歌するかのように、ひときわ明るく閃光のなかに浮かびあがる。

駐日K国公使、李青玉が亡命を決意するに至った経緯には、日米K三国の複雑多岐にわたる政治状況が絡み合っていた。

言わば、李青玉は三国間の悲劇的な政治力学の圧力に翻弄され、押しつぶされようとしている哀れな犠牲者でもあった。

そのことは、ここ十年足らずの間における李青玉の経歴からも、うかがい知ることができた。

李青玉は、アメリカ駐在KIA（K国中央情報部）の総元締め金錫用駐米公使の下で、五年間対米議会工作に奮闘してきた。彼は金錫用の指示に従い、主としてアメリカ上院に議席をもつ有力議員をねらってワイロを贈りつづけ、アメリカの対K国政策を有利に展開させるための秘密任務に才腕をふるったのだ。

彼の努力は着々と実を結んでいた。

李青玉の才能を高く評価した本国政府は、ついで彼を駐日公使に栄転させ、日本駐在KIAの最高責任者とし

て、日本の政界に対する買収工作に専念させることにしたのである。彼は、日本でも、その能力を遺憾なく発揮しているかに見えた。

李青玉は、まず、親K国派の与党政治家や国会議員を対象に、ワイロ工作を円滑に進めるための秘密ルートの構築に力をいれた。「青瓦グループ」と呼ばれる与党政治家、国会議員の一団が、それである。

過去三年間、李青玉は、ほとんど寝食を忘れて、このための秘密工作に没頭したのである。

K国大統領府、青瓦丘から送られるワイロは、すべてこの青瓦グループを通じて、日本の政界に流れた。

ところが、ここに意外な客観情勢の変化が生じたのである。

折りしも、アメリカ議会では、ウォーターゲート事件をきっかけに、政界浄化の動きが活発化して、KIAの対米議会買収工作の糾明がアメリカ上院の特別委員会における緊急課題として俎上にのぼったのだ。

この情勢をふまえ、日本でもKIAの対日買収工作の追及が革新・中道各野党の政治目標として浮かびあがり、衆参両院に「K国問題特別委員会」が設置され、徹底的糾明への気運が高まった。

こうなると、李青玉の政治的立場は実に微妙このうえない。彼こそは、K国政府の対米、対日秘密工作の全容を知る最も有力な証人なのである。

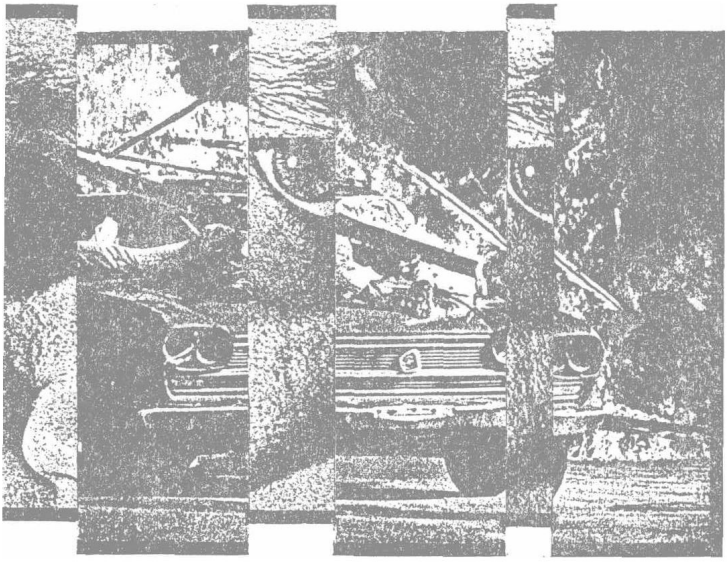
K国政府は、李青玉に対し帰国命令を発した。そのねらいは、言うまでもなく、李青玉の口を封じるためである。K国のような人権保障のカケラもないナチスまがいの軍事独裁国家では、一人の外交官の口封じのための手段には、こと欠かない。

李青玉は、すでに一歩先んじてアメリカ亡命に踏み切っている、かつての上司、金錫用アメリカ公使からの誘いに乗って、ついにアメリカ亡命を決意したのだ。彼の家族は、一足先に渡米していた。アメリカ司法当局は、李青玉が議会買収工作の全容を明らかにした場合、彼自身については、刑事訴追をしないという免責保障を与えていた。

外国公館専用車であることを示すブルーのナンバープレートをつけたリンカーンは、高速有料道路にのると、スピードを早め、一路、羽田国際空港へ向けて疾走した。

不測の事態にそなえ、リンカーンの前後に、それぞれ一台ずつの警視庁パトカーが警備についていた。それをさらに二台の白バイがサイレンを鳴らして先導する。

リンカーンの後部座席には、アメリカ大使館直属のシークレットサービス要員二名が背広の内側のホルスターにコルト四五口径をしのばせて、李青玉を両脇からはさみこむ形で警固していた。
まずは、万全の警備体制である。
もっとも、日本の政府与党としては、李青玉のアメリカ亡命は、決して歓迎すべきものではなかった。
もし、李青玉が、アメリカ上院での証言の中で、青瓦グループを通じて多額のワイロを、日本の政府与党に贈った事実についても、その真相を暴露したならば、現内閣は決定的な政治危機に直面することになるからだ。
しかし、アメリカ国務省が李青玉の亡命を許可し、外交ルートを通じて正式に日本政府の協力を要請してきた以上、政府としては李青玉の身柄の安全を図るべき国際儀礼上の義務を、なおざりにするわけにはいかない。
李青玉の亡命を契機として、政府与党は、いまや結党以来の苦境に立たされていた。
空港ビルの明かりが淡い夕霧のなかに、白っぽくにじんで見えた。
リンカーンの前部座席にいた大使館員が、ちらりと腕時計を眺める。午後六時四十分だ。
ホノルル経由、ロスアンゼルス行きのパンナム機は、すでに一般乗客の搭乗を開始しているはずだった。
リンカーンは、白バイとパトカーに護衛されたままの体制で、エプロンに駐機中のパンナム機に横づけにされるのだ。
亡命者が車を降り、タラップを上って、機内に姿を消すのと同時に、乗降口が閉じ、離陸準備ＯＫのサインが機長から管制塔に送られる手はずになっている。
つまり、亡命者李青玉は、最後の搭乗者として予定されていた。彼が早く到着しすぎると、それだけ待ち時間が長くなり、狙撃の危険度も増すからだ。
「ピッタリだな。早くもなし、遅くもなし」
金髪の若い大使館員は、隣りの日本人運転手を見やって微笑した。
運転手は、空いたほうの手を宙にかざし、二本の指で円い輪をつくって、微笑を返す。
李青玉の表情にも、安堵の影がさしこんでいた。
ホノルルまでは、彼の両わきに座っている屈強なシークレットサービス要員二人が付き添ってくれる。
ホノルルからはＦＢＩが護衛につく。
（しかし……）



と李青玉は思った。暗殺者に狙撃される危険率から言うと、ロスアンゼルスに到着し、アメリカ本土に亡命者としての第一歩を踏み出してから以後のほうが、はるかに危険が大きいのだ。

繁栄の眩しい光の陰に暗い貧困が巣食い、自由と背中合わせに暴力が同居するアメリカ社会を思うとき、危険な長い旅は、いよいよ、これから始まろうとしているのだった。

空港ビルの明かりが、すぐ眼の前に見えてきた。

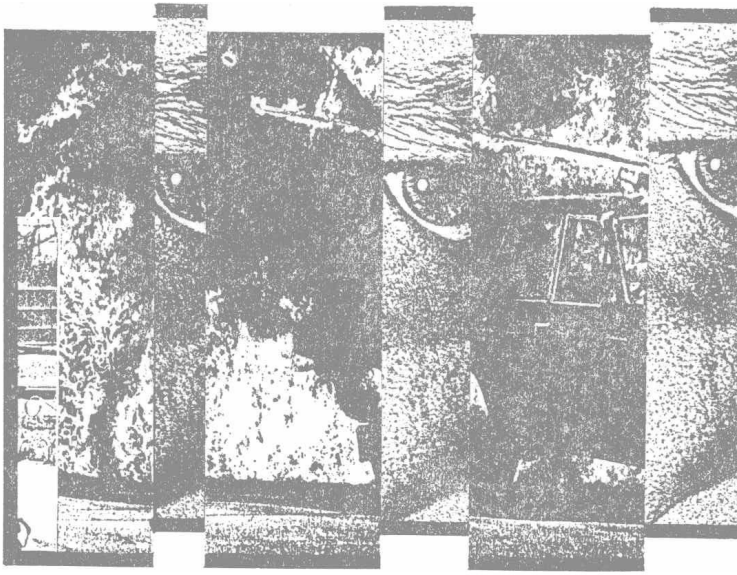
李青玉は、いくぶんなりとも気分を落ち着かせようと、ポケットに手をいれ、タバコを取り出した。白いフィルターつきのシガレットを一本、指先で引きぬいて、分厚い唇にはさんだ。背広の上衣をまさぐり、ライターを探したが見あたらない。

「火をおつけしましょう」

横にいたシークレットサービスがダンヒルのライターを亡命者の顔に近づけ、点火したその時であった。……

ライターの点火が死へのいまわしい引金でもあったかのように、空気を圧する爆発音が起こり、リンカーンの車体が真っ二つに割れ、赤く巨大な火柱が車体の底からそそり立った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton



一瞬のうちに、李青玉と護衛者たちの五体はボロ布のように、ずたずたに引き裂かれていた。

2

K国公使、李青玉暗殺事件が発生する四日前の十月十九日夜、京都木屋町の高級クラブ「千代乃」では、見るからに羽振りのよさそうな中年の紳士が、ホステスたちに取りまかれながら、悠然とブランディグラスを傾けていた。

その紳士は堂埜秀臣四十五歳。彼は、大津地方裁判所の裁判官であるが、ホステスたちは、誰ひとり彼の素姓はおろか、職業も身分も知らないのだ。

ただ、ホステスたちは、彼のことを何となく「先生」と呼んでいた。

「ちょっと、先生。そのタイピン、ダイヤと違うのん？」

美也子という名の年増のホステスが、堂埜のネクタイピンに、ふと眼をとめて言った。水商売の経験者だけにガラス玉と、ほんもののダイヤの区別ぐらい、ひと眼でわかるのだろう。

「ブルーホワイトだよ。二カラットある。見ろよ、カフ

スボタンもだ。タイピンとカフスボタンがセットになっていてね」
堂埜は、さりげない様子で、カッターシャツの袖口をちらりと、のぞかせて見せる。燦然と輝く大粒のブルーホワイトの妖しい光彩。台はプラチナだ。
堂埜を取りまく若いホステスたちは、思わず息をのんだ。
「ひゃあ。これ、ほんもの？……」
「ちょっと、見せてぇ……」
「いやあ、うちにも一つ欲しいわあ……」
ホステスたちは、きゃっきゃっと嬌声を発し、堂埜に飛びついてきて、ダイヤの装身具をいじくりまわした。
「ガラス玉だとでも思ったのかい？」
堂埜は、若い女たちのはちきれそうな肉体の弾力を身近に感じ、香水の香りにむせびながら、上機嫌で外国タバコの煙を吹きあげていた。
向こうのボックスにすわって、ねちねちと国産のウイスキーをなめていた社用族風の三人連れの客が、じろりと堂埜を見つめ、嫉妬深い眼ざしを投げてくる。
堂埜は、腕時計を見た。間もなく午前零時である。
腕時計は、これも彼自慢のパテック・フイリップの銀側だった。二・五ミリの厚さしかない超薄型の舶来最高級品である。百万円やそこらで買えるシロモノではない。
「……この時計、上等そうやわね。こんなん、うちも欲しいわあ。……これと同じのをテレビのコマーシャルで見たけど、あれと違うのん？」
ピンクのマニキュアの細っそりとした白い指先が、いぶし銀の時計バンドを撫でている。強く抱くと折れそうな痩せ型の愛くるしい女であった。
彼女は祐子と言った。大きく開いたドレスの背中のすべすべした小麦色の肌に、堂埜は手を回していた。
「テレビのコマーシャル？　そんな大衆品じゃないよ、この時計はね。パテック・フイリップがテレビにコマーシャルを流したりはせん。……しかし、話のなりゆきでは、こんなのを買ってやってもいいんだぞ」
と堂埜は、祐子の可愛い耳たぶに口をつけて、ささやいた。
「ママには内緒でね……」
ぺろりと祐子は白い歯並みの間から、赤い舌の先をのぞかせる。
「ママには黙ってりゃあ、それでいいんだ。……今夜、あたり、どうだね？」

と言ったとき、祐子が堂埜の太股をつねった。
「シッ。ママがくるわ」
客を送って出たママの千代乃が、粋な仕草で和服の襟をかき合わせながら店に戻ってきた。
このクラブのホステスたちは、みんな、堂埜をママのパトロンだと思いこんでいる。月給二十四、五万円そこそこの地方裁判所の判事補だなんて、誰も知らないのだ。
それも、そのはずで、二カラットもあるダイヤのネクタイピンを胸につけ、カフスにも、それと揃いの大粒のブルーホワイトを輝かせ、パテック・フイリップの銀時計を腕にはめている男が、現職の裁判官だとは誰も考えないだろう。
裁判官とは、清貧にして高潔、謹厳にして実直――これが庶民の抱いている裁判官のイメージである。
堂埜の着ている背広にしても、品のよい英国製の最高級品で、彼はわざわざ東京に出向き、銀座の「英吉利屋」に注文して、一着三十八万円も出して仕立てさせたものだった。
店の照明が、いっとき暗くなり、螢の光のメロディが流れはじめた。
それをしおに、堂埜を取りまいていたホステスたちは、一人減り二人減りして、誰も傍にいなくなった。
テーブルの上のグラスを片づける女。……
ドタン、バタンと更衣室のドアが気ぜわしげに開閉される。……「お疲れさん」と声をかけ、きっと待っていてくれると信じている男のもとへ駆けつける、あわただしいブーツの足音。……
クラブの退けどきなんて、どこでも、味気ないものだが、今夜の堂埜は、どうしたわけか、いたたまれないような侘びしさをおぼえていた。彼は眼のまえのブランディグラスを、指の間にはさんで持ちあげると、ナポレオン・カミュの馨しき香りを嗅ぎ、極上コニャックのまろやかな味を舌先で弄びながら、ぽっかり穴のあいた胸のなかの空白をまぎらわせていた。
例の三人連れの客は、勘定書にサインして階段の下へ消えていった。
しかし堂埜のところへは誰も勘定書を持ってはこない。ママのパトロンに勘定書を回す馬鹿なホステスはいないのだ。
「また、こんどね。先生……」
着替えをすませた祐子が帰りがけに堂埜の耳もとで、熱い息を吹きかけながら、思わせぶりにささやき、そし

て赤いワンピースの背を向けた。
細身のわりには肉づきのいいセクシーな尻のゆれ具合を、舐めるような眼ざしで、堂埜は見送った。
「ねえ。あんた。あの子はあきまへんでえ」
レジで売上げを勘定していたはずの千代乃が、堂埜の傍に寄ってきた。
「どうしてなんだ？」
堂埜は笑った。祐子のセクシーな尻のゆれ具合が、眼の前にちらついている。
「どうも、こうも、あきまへん」
千代乃は、こわい顔で堂埜をにらんだ。
芸者あがりの千代乃は、四十を過ぎても、したたるような若やいだ色気を、さりげない身のこなしのうちに、そこはかとなく醸し出している女であった。
「なぜ、いけないんだね？」
堂埜は、冗談めかした口ぶりで言った。
「そないに、ご執心なら、言うて進ぜまひょ。あの子は、身体に刺青をしているんやそうどす」
「刺青？……身体の、どこに刺青をしているのかね？」
堂埜は、にわかに興味をおぼえた。
「知りまへん。店の女の子が、わたしに、そう言うてました」
「つまり、祐子には極道者のヒモがついていると、そう言うんだな？」
「そうです。そやから、あんたはんみたいに、ご身分のあるお方が、そんな女に手を出したら……ね？、おわかりでっしゃろう？」
千代乃は、しなだれかかるようにして、堂埜の膝に手をおいた。小粒のダイヤを散りばめた大きなエメラルドの指環が、白い指に妖しく輝いていた。
千代乃は、むろん堂埜の身分を知っている。いやしくも裁判官たる者が、ヤクザのヒモのついたホステス風情と関係をもった場合、その身にふりかかるかもしれない社会的な恥辱と不名誉を指摘し、祐子のことをあきらめさせようというのだろう。
「さ、行きまひょ」
と千代乃は堂埜の手をとった。しっとりとして肌ざわりの柔らかな温かい手であった。
「今夜、よろしおすのやろう？」
そう言って、千代乃は、うるんだような黒い瞳を、じっと堂埜に注いでいた。
「うむ。まあな」

堂埜は、あいまいに返事した。
千代乃の店で飲むからには、堂埜としても、そのつもりできているのだ。
(しかし、遅かれ、早かれ、手を切らねばならん女だな)
腹の底で、つぶやきながら、堂埜は千代乃と連れだって「クラブ・千代乃」を出た。
店の前にハイヤーが待っていた。
木屋町筋の柳並木が冷たい夜風にゆれ、堂埜の頬を快くなでた。
車は御池通りから堀川通りを南下し国道九号線へ出て桂川の鉄橋を渡った。
明るい深夜の月光が桂川の川面に映え、銀色の小皺を波立たせていた。
堂埜は、祐子のことを考えていた。
あの手の痩せ型の女は、堂埜の好みのタイプであった。
いったい、祐子は、身体のどの部分に刺青をしているのだろうか。
背中でないことは、すでに検証ずみだ。それに胸でもない。彼女は今夜、背中と胸の大きく開いた黒いドレスを着ていたのだ。刺青があれば、わかったはずだ。
背中でもなく、胸でもなく、それでいて衣服で隠せる部分と言えば……残る部分は一箇所しかない。あの部分だ。
「嫌なお人。ひとりで、にやにや、笑うたりして」
千代乃は堂埜の顔を見ながら、肘でこづいた。
「言うときますけど、祐子だけはあきまへん」
千代乃は、堂埜の腹の底を見すかしたように言う。
「じゃあ、ほかの女の子なら、いいんだな?」
堂埜は笑った。
「いいえ。それもあきまへん。よろしおすか。浮気しやはったら、ここを、ちょんとハサミで切らしてもらいますさかいにな」
覚悟おしやす、と千代乃は堂埜の股の間を、ぎゅっとにぎった。
(この女、案外、本気でやりかねんぞ)
堂埜は、千代乃のいつになく真剣な顔つきを見て、正直なところ、薄気味悪くなっていた。
千代乃の家は、老ノ坂にかかる手前の閑静な住宅地にあった。二百坪ほどの敷地に、手入れのいきとどいた樹木が茂り、数寄屋風の瀟洒な構えの平屋が日本庭園に面して建っている。
ちょっと見たところ、隠居暮らしの金持ちが、のんび

りと余生を送っていそうな閑寂な佇まいである。
五十過ぎの住みこみの女が、風呂の湯を立てて二人を待っていた。
堂埜が、檜材の香りのただよう湯ぶねにひたり、冷えた身体を温めていると、いつものように、千代乃が湯もじ一枚をまとった姿で風呂にはいってきた。
「お流ししましょ」
「うん」
堂埜は、うなずき、湯ぶねを出ると、湯のしたたる身体で、どっかと腰かけに尻をおろした。
すると千代乃が、かいがいしく、堂埜の身体を、すみからすみまで洗ってやるのだ。
堂埜は裸の股を開き、両腕を突き出して、じっと千代乃のなすがままにさせている。
結婚生活の経験もなく、子も生んでいないから、千代乃の身体は、まだまだ男の放埒な欲望を満たすには充分なものをそなえていた。
堂埜は、眼の前に突き出ている豊満な乳房を、不意に、片手でつかみとった。
「こ、こないなときに……」
千代乃は一瞬、眼をとじた。乳房をつかまれている快感に酔っている表情だった。
堂埜は、もう一方の空いた手で、湯もじを割り、股間に手をさしいれた。
「……嫌あん……」
千代乃は身体をよじった。
「その腰のもの、とってしまえよ」
堂埜は、久しぶりに、風呂のなかで欲情をもよおしていた。祐子の刺青のせいかな、と堂埜は思いながら、千代乃のしらじらとした下半身が、あらわになるのを眺めていた。
千代乃は、恥じらいのこもった挑発的な微笑を口もとに浮かべ、きらきら光る濃艶な眼ざしで堂埜を見下ろしながら、座ったままの男の眼の前に白くなめらかな裸の下半身をさらして立った。
まだ湯につかっていない千代乃の身体は冷えきっていた。熱い湯に火照っている堂埜には、それがまた爽快な肌ざわりに感じられるのだ。
(この部分に、刺青しろ、と言ったら、千代乃は、承知するだろうか?)
柔らかな白い肌が針で破られ色素がすりこまれるときの千代乃の苦痛を想像すると、堂埜は自分でも不思議な

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton